第一回荒尾市民病院あり方検討会議事録要旨

◇日　時；平成２１年８月６日（木）13 時 30 分から 15 時 40 分まで
◇場　所；荒尾市民病院　４階会議室
◇出席者；【あり方検討会委員】・・・７名
　小野友道氏（熊本保健科学大学学長）、生野繁子氏（九州看護福祉大学看護学科長）、藤崎龍美氏（荒尾市社会福祉協議会会長）、鴻江圭子氏（荒尾市行政改革推進審議会）、下條寛二氏（株式会社 近代経営研究所専務取締役）、立石和裕氏（立石公認会計士事務所代表）、池田洋一郎氏（有明保健所所長）
欠席：高橋洋氏（荒尾市医師会会長）
事務局；【荒尾市】・・・８名
前畑市長、吉永副市長、馬場企画管理部長、山﨑企画管理部次長兼財政課長、宮里総務課長、
丸山政策企画課長、浅田課長補佐、田川主査
【荒尾市民病院】・・・１０名
大嶋病院事業管理者、不破副院長、大河原副院長、島崎看護部長
荒牧副院長兼事務部長、近藤事務部次長兼総務課長、森田医事課長、
原総務課課長補佐、前田係長、西山主任
以上、出席者計　２５名

１．　開会

丸山政策企画課長が開会を宣言

２．　委嘱状交付

前畑荒尾市長から各委員へ委嘱状を交付

３．前畑荒尾市長挨拶

地方財政健全化法に基づく連結実質赤字比率の対象となる病院事業は、累積欠損金が 40 億円を超え、施設の老朽化も進むなど、本市の財政全体の緊急かつ重大な課題となっており、一刻も早く不良債務等の解消を図る必要がある。

本検討会では、病院が目指すべき医療や経営健全化対策など、将来に向けたあるべき姿について大所高所からご議論していただくとともに、「公立病院改革ガイドライン」に基づき策定した「荒尾市民病院中期経営計画」の評価を兼ねて、ご意見を賜りたい。

４．荒尾市民病院事業管理者挨拶

かつて５０人いた医師が平成１９年度には２８人まで減少し、収益に大きく影響したが、２０年度は市とも協力し赤字を大幅に縮小することができ、平成２１年度は医師が３人確保できるなど明るい兆しが見えてきたところである。

現在、中期経営計画に基づき、地域医療支援病院、脳卒中拠点病院の指定など質の高い

医療を目指して努力している。
　市民病院のあり方について、活発に議論いただき、良い結果を出していただきたい。

５．会長及び副会長の選出

　荒尾市民病院あり方検討会設置要綱第６条第１項の規定により、小野委員を会長に、高橋委員を副会長に選出し、同要綱第７条により会長が議長となり、議事を進行した。

６．会長挨拶

　来年２月までに市長に提言するというスケジュールで数回しか議論できないが、それぞれの分野のプロの皆さんなので、会議での議論を活発にし、会議後も連絡を取りながら忘れないように気をつけて進めていきたい。
　荒尾市民病院は、関係者の努力でここ１～２年いい傾向だと周りからも聞いている。どなたも荒尾市民病院の“応援団”として厳しい意見を出し合いながら、よろしくお願いしたい。

７．委員紹介　　名簿順に自己紹介

８．検討会の進め方

　事務局より、資料２に基づき、検討会の今後のスケジュール（４～５回開催し、来年２月を目処に荒尾市長へ提出する提言書の取りまとめを行う）及び同検討会での発言等を議事録にまとめたものを公開することについて説明を行い、全会一致で了承を得た。

９．検討事項

（１）荒尾市民病院の概要について

　市民病院近藤次長より資料３に基づき説明

（主な意見）

・ベッド稼働率７６％は、他に比べ低いのか？

・２７４床だが、救急分も確保する必要があるため実質は２５０床程度で実際の稼働率はもっと高い。自治体病院では７０％台が普通ではないか。しかし、民間に比べれば低いので、今後、ベッド稼働率を上げていくことが経営上のポイントである。

・非常勤職員が約１００名と多いが、職種は？

・看護師が約４０名と最も多い。

（２）全国の医療機関（自治体病院）が置かれている現状について

　荒尾市政策企画課田川主査より、資料４に基づき説明

（主な意見）

・何か付け加えることはないか？

・資料がよくまとまっている。民間と自治体病院の比較をここまで詳細に分析している資料はめずらしい。

・資料１－２の６ページで、１０万人当たりの勤務医だけでなく開業医のデータも出してほしい。

・印象では、ここの医療圏は開業医が多いということか？

・そのとおりである。

（３）荒尾市民病院中期経営計画について

市民病院荒牧事務部長より資料５に基づき説明

（４）平成２０年度決算見込みについて

続けて、関連があるため市民病院近藤次長より資料６に基づき説明

（５）荒尾市民病院の現状や課題についての意見交換

（主な意見）

・中期経営計画や平成２０年度決算見込みなどの説明があったが、経営の視点からどうか？

・いい結果の数字が出ており、かなり効果が出ているのでは。

・１９年度までのデータしか見ていなかったが、２０年度はすばらしい成果が出ている。給与削減まで踏み込んだところに、院長のリーダーシップのもとに職員が危機感を持って取り組んだ姿勢が感じられる。今後も引き続き、より良い病院を目指してがんばってほしい。

・職員一丸となって努力した結果だと思うが、危惧するのは１４億円の返済である。安定した質のいいサービスを提供しないと、患者が離れてしまう。地域の人が市民病院とどう関わっていくかが重要だと思う。ボランティア参加の状況について教えてほしい。

・地域とのかかわりは大変重要である。そのために、①医療との関わりでは、診療所との連携を推進している。②市民との関わりでは、広報「あらお」に毎月

病院の紹介を掲載、本年４月から院内にボランティア委員会を立ち上げ、ボランティア控室の設置を予定している。地域に出向く出前講座も積極的に実施していきたい。

・地域医療支援病院の指定については、荒尾市民病院出身の開業医の理解や歴代院長の努力が結実したもので、地域医療の環境が良いという背景も忘れてはならない。

・自治体病院として、急性期医療や救急医療をがんばってほしい。地域医療支援病院については、１４日で退院をさせるということは退院後の受け皿が心配である。ドクターだけでなく看護師の労働条件などに対するフォローも大切では。

・給与カットがあっているということで、医療の質の低下が心配だが、研修予算は減らしてないようなので少し安心した。資格取得などでがんばっている看護師のためにも手当の充実やポストも用意してほしい。

・認定看護師は今年の県内合格者６名のうちの１名が荒尾市民病院で、公費負担により認定看護師を取得した。

・新型救急救命センターを目指すということだが、医師の過労や不採算分野であり、赤字になる恐れはないか？

・赤字の心配が全くないわけではないが、現在、重症の救急は、遠い熊本市や久留米市に行っている現状である。新型救急救命センターは人口３０万人に１箇所は必要なので、有明医療圏に大牟田市を含めれば、ちょうど３０万人になる。地域完結型医療のために、救急に医師が３名、ヘリポートも必要と考えている。

・医師のＱＯＬ（生活の質）を高める場の提供も重要ではないか。

・医師手当や働く環境の改善に努めている。休みの取得ができるように、当直はよそからの非常勤医師６名でカバーしている。

・よそからの医師が増えると、患者から見れば先生が代わり不安が募る。症状に変化があったときに、どこにどう連絡したらいいか。早期退院後の連携や体制はどうなっているか？

・担当科に連絡してもらう仕組み。

・サービスの質の問題がある。自分の状態を知っている医師に相談したいものである。また、退院後は、医療、福祉、介護が連携してケアする“シームレ

ス連携” が重要ではないか。

・こうした問題には相談支援センターを設置し対応している。

小野会長：本日は時間が来たためここまでとしたい。次回までの宿題として、各自問題点を１０項目考えてきてください。

（６）その他

丸山政策企画課長が、次回会議は 9 月下旬を予定しており日程は後日調整、本日はこの後希望者を対象に院内視察を行う旨説明した。

１０．閉会

小野会長が午後３時４０分に荒尾市民病院あり方検討会の閉会を宣した。

＜院内視察＞

参加者：小野会長、立石委員、下條委員

視察場所

① 救急・ＩＣＵ
② 相談支援センター
③ 患者図書館
④ ＣＴ・ＭＲＩ・リニアック
⑤ 化学療法室

以上